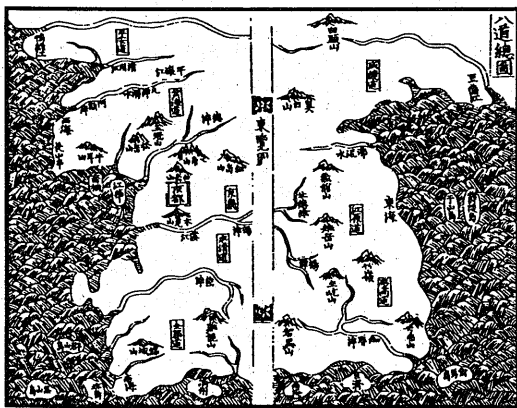


冊	子	目	録	
	落	穂	拾	い

『国立国会図書館所蔵
朝鮮関係地図資料目録』

書誌づくり——何と辛くさい作業であらう。苦勞の連続である。それがわかっていながら、なぜ私はこのようなことをやることになったのか。

その頃、私は地図室のカウンターで悪戦苦闘の連続だった。当館の地図資料の検索はなぜこんなにもやっかいなのか。ほとんど地図資料は地図室にあるものの、例外も多く、むしろ館内各所に散在しているといったほうが実情にあっている。地図帳および明治～昭和前期の折りたたみ図→図書扱い、江戸期以前の地(絵)図→古典籍課所管(ただし、複製図は地図室所管)、政治家の私文書中の地図→政治史料課所管、アジア諸言語の地図帳→アジア資料課所管 etc. 利用者は



『新增東国輿地勝覧』所載「八道総図」より

もちろんのこと、職員でさえもその全貌を把握することは困難である。コレクションとして特色があり、かつ自分の関心領域でもあった朝鮮関係の地図資料についてだけでも、一冊で当館の所在が一望できるものをつくれないうか。これが一つめの理由である。

ところで、私はかれこれ十年近くも閲覧業務に携わっているが、本当のところは利用者と話をするのは苦手なほうである。できることなら、話をせずして利用者を満足させたいとつねづね思っている。逆に利用者のほうでも、多くの人になるべくなら(愛想の悪い?)カウンター職員に尋ねることなく用をすませたいのではあるまいか。互いに口をきかずにことを解決できる。これこそ図書館における利用者と職員の最も幸福な関係であろう。しかるに、わが国立国会図書館の現実……。便利な書誌があれば、利用者も私も少しは楽ができるのではないか。これが二つめの理由である。

しかし、理由はあとから考えたようにも思える。実は作業は唐突に始まったのだ(ある人物の口車に乗せられたという説もあり)。当初は本誌掲載予定であったが、量的かつ時間的に難しくなり、三年後にやっと日の目を見た。その間に、私自身、地図室カウンターで楽をしようという目標の達成度を確かめる機会もなく他課へ異動した。この書誌は編者の思わくどおりの機能を果たしてくれているだろうか、気懸りである。

(参考課 石川武敏)